

日付 2022年2月2日(水)～6日(日)@サブテレニアン (大山/板橋区役所)

作品 「銀河鉄道の夜」

原作 宮沢賢治

脚色/演出 長堀博士

長堀博士が演劇作品として描く「銀河鉄道の夜」は、銀河鉄道が実在したのでは？という大胆な想像から話が進んでいく。宮沢賢治が「銀河鉄道の夜」を書く切っ掛けとなったのは、若くして亡くなった最愛の妹・トシの影響が大きいだろう。賢治は、トシが亡くなった後、実際に鉄道の旅に出ている。そこで、この旅の先で、妹と会うことがあるのではないかとそんな思いを抱き、そのことが「銀河鉄道の夜」や詩集「修羅と春」に結実しているのは有名な話だ。また、私たちが勘違いしがちなこととして、銀河鉄道というもの、銀河をまるで宇宙船のように飛んでいる、という思い込みがあると考えた。漫画やアニメの影響は（そちらも名作であるので）大きい。だが、賢治が実際に書いた文章を読めば分かるが、作中に出てくる銀河鉄道とは地面の線路を走り、空を飛んでいるわけでは決してない。アメリカなど遠くまで行くものの、つまりは、地続きの話であるのだ。それらのことを総合すると、賢治が妹が亡くなった後に旅をした「岩手軽便鉄道」の旅こそが、「銀河鉄道の夜」の旅そのものであったのではないかと

・・・そのような思いを得て、長堀博士が描く本作は、現代の、恋人を亡くした若者が、その恋人との再会を夢見て、賢治の足跡を辿ろうと実際に岩手に存在する列車に飛び乗るところから物語は始まる。そして、その列車で「銀河鉄道の夜」の文庫本を広げた時に、その物語と似た（同じの）不思議な出来事に遭遇する。というもの。それら物語を通して、宮沢賢治が残した「死生観」に触れていく、というのが、今回の演劇作品のコンセプトである。空を飛んでしまわない、地続きの、私たち自身の物語としての「銀河鉄道の夜」を描く試みの舞台作品。

プロフィール

楽園王（ラクエンオウ）

1991年、田畑ディブラッツにて旗揚げ。

劇作家である長堀博士の戯曲を、自身の演出で上演する目的で設立。その後10年を経て、長堀の独自性の高い演出が評価され、古典戯曲や文学作品なども劇団のレパートリーに加わっている。

(財)舞台芸術財団演劇人会議が主催した、利賀演出家コンクールの第1回から連続して参加、古典戯曲を上演し、第5回のイヨネスコ『授業』の演出にて優秀演出家賞を受賞。イヨネスコ『授業』は長年上演され続け、BeSeTo 演劇祭などの国際フェスで再演された。また、同コンクールでは、その後、審査員も2期務めた。

利賀での評価から、(財)静岡県舞台芸術センターから2度の招聘を受け、静岡で開催された春の芸術祭にて、寺山修司『青ひげ』、エウリピデス『メディア』を上演している。

その後、利賀のコンクールが演劇人コンクールと名称が変更された以降には、チェーホフ『イワーノフ』の演出で奨励賞を受賞。

また、劇団主宰の長堀は、OM-2や山の手事情社など日本の劇団が海外で上演する際には舞台監督をすることが多く、これまで、ベルン(スイス)、ベルリン(ドイツ)、シティン(ポーランド)、アテネ(ギリシア)、プラハ(チェコ)、上海(中国)、ソウル(韓国)、バンコク(タイ)、シカゴ(アメリカ)、シビウ(ルーマニア)でステージワークを行っている。それら海外での舞台制作に係わることで、楽園王の舞台創作に大きな影響を与えている。



イヨネスコ「授業」舞台写真



チェーホフ「イワーノフ」舞台写真

プロフィール

長堀博士 (ナガホリヒロシ)

1966年、東京生まれ。高校時代より演劇を行い、仲間の様々な劇団に戯曲書下ろし、1991年には、自身の手で自作を上演する目的で楽園王を設立。その後、演出家賞としての評価を得て、古典戯曲や文学作品などもレパートリーに加えている。

劇作家として、楽園王での上演以外にも様々な劇団、企画へ書下ろしを行い、上演作品は短編も含めると50作品に及ぶ。

演出家として、利賀演出家コンクールにて、優秀演出家賞を受賞。利賀演劇人コンクールでは、奨励賞を受賞。古典作品の演出を多く手掛け、三島由紀夫や寺山修司など日本の作家から、チャーホフやシェイクスピアなど海外の古典まで、30作品に及ぶ古典を上演してきた。

「戯曲」を、声に出して読んで音声化しないと意味を成さない文学としては「詩」と同義だと考え、耳で聞いて気持ちいい独特の台詞表現の舞台作品を上演している。

その他、様々な劇団で、舞台監督、音響、照明などを行っている。海外での仕事も多く、また、バレエやオペラ、歌舞伎や狂言など、様々なジャンルの舞台にスタッフとして付いた経験を持つ。

